

# 石見相聞歌群の虚実

緒方惟章

柿本朝臣人麿、石見国より妻を別れて上り来る

時の歌二首并に短歌

A 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ

瀉なしと磯なしと 人こそ見らめ よしゑやし浦は

無くとも よしゑやし 瀉は磯は 無くとも鯨魚

取り 海辺を指して 和多津の 荒磯の上に か青

なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽

振る 浪こそ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉

藻なす 寄り寝し妹をし妹がたもとを 露霜の 置き

てし来れば この道の 八十限毎に 万たび かへ

りみすれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山

も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が

門見む 靡けこの山 (巻第二・一三二)

反歌二首

B 石見のや 高角山の木の隙よりわが振る袖を妹見つら

むか (一三三)

C 小竹の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別

れ来ぬれば (一三三)

或る本の反歌に曰はく

D 石見なる高角山の木の隙もわが袖振るを妹見けむ

かも (一三四)

E つのさはふ 石見の海の 言さへく 韓の崎なる

海石にそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉藻は生ふる

玉藻なす 靡き寐し児を 深海松の 深めて思へど

さ寝し夜は いくだもあらず 這ふ蔓の 別れし来

れば 肝向ふ 心を痛み 思ひつつ かへりみすれ

ど 大船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱ひに 妹

が袖 さやにも見えず 孀隠る 屋上の 山の一に云ふ 山の

雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠るひ来れ  
ば 天つたふ 入日さしぬれ 大夫と 思へるわ  
れも 敷袴の 衣の袖は 通りに濡れぬ (二三五)

反歌二首

F 青駒の足搔を早み雲居にそ妹があたりを過ぎて来に  
ける一に云ふ、あたりは隠り来にける (二三六)

G 秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱ひそ妹があた  
り見む一に云ふ、散りな乱ひそ (二三七)

或る本の歌一首并に短歌

H 石見の海 津の浦を無み 浦無しと 人こそ見らめ  
瀉無しと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも  
も よしゑやし 瀉は無くとも 勇魚取り 海辺を  
指して 柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖  
つ藻 明け来れば 浪こそ来寄せ 夕されば 風こ  
そ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 靡  
きわが宿し 敷袴の 妹が手本を 露霜の 置きて  
し来れば この道の 八十限ごとに 万度 かへり  
見すれど いや遠に 里放り来ぬ いや高に 山も  
越え来ぬ 愛しきやし わが婿の児が 夏草の 思  
ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡けこの山  
(二三八)

反歌一首

I 石見の海打歌の山の木の際よりわが振る袖を妹見つ  
らむか (二三九)

右、歌躰同じといへども句々相替れり。因りてこ  
こに重ねて載す。

柿本朝臣人麿の妻依羅娘女子、人麿と相別るる歌  
一首

J な思ひと君は言へども逢はむ時何時と知りてかわが  
恋ひざらむ (二四〇)

長短歌計一〇首より成る上掲の《石見相聞歌群》に關  
しては、その作品の構成と作品生成の場とを槌と踏まえ  
て、宮廷サロンにおける人麻呂の創作詠としての性格を  
明確に証した、中西進・伊藤博両氏の卓論を我々は有し  
ておる。この歌群の本質はこの両氏の論により究め尽く  
されている、と称してもそれは強ち不当な物言いではあ  
るまい。しかるに、近時、我々はまた、両氏の立場を排  
する形で、水死刑に処さるべき運命の下に、妻と共に過  
ごした国府沖合の韓島を離れ、一人高津の沖合鴨島の地  
に移送される、流人・人麻呂とその妻の、悲傷の詠歌群と  
して本歌群を解さんとの、梅原猛氏の極めて強力なる提  
唱に接するに至った。言うなれば、それは、本歌群をし  
て人麻呂の美人生の反映と見る立場であるわけだ。

ここに至れば、私もまた私の立場から、更めて本歌群の虚実——本歌群は果して人麻呂の実人生の完全なる反映であるのか、或いは宮廷サロンにおける人麻呂の創作詠であるのか。そして、もし本歌群が人麻呂の創作詠であるということになれば、その創作にあたり人麻呂の体験はどれ程素材として生かされているのか——を考察すべき必要を痛感せずにはいられない。よって、以下これを考察してゆくわけであるが、本稿においてはその紙数の制約も格別に厳しいこと故、必ずしも具体的に詳密に論ずることを許されない。個々の問題の詳細は、それ故、意図的に多く付した註のその指し示す原拠において確かめられたい。

## 二

さて、仮にAからJの符号を付した上掲計一〇首の長短歌群（訓は岩波書店刊「日本古典文学大系」本のそれに依る。但し、A歌に先立つ題詞中「石見国より妻を別れて」の圈点部、及び、C歌「小竹の葉はみ山もさやにさやげども……」中の圈点部は、私見により訓を改めた）をして「石見相聞歌群」と称することについては異論は存すまい。この「石見相聞歌群」より、我々は、(1)人麻呂は石見国より上り来らんとして、石見国「角の里」にその「妻」を残して

来たこと（A、J歌に関わる題詞、及びA、I歌）、(2)その「妻」の名は「依羅娘子」であったこと（J歌の題詞）、の二点を知ることになる。神田秀夫氏に、このJ歌題詞中の「依羅娘子」なる四字を疑い、この石見妻は「石見娘子」としも称すべき人物——恐らくは石見国在住の遊行女婦のごとき存在であったらう、との説が存するとは言え、万葉集は、同じ巻第二の挽歌部に収める「石見挽歌群」(二三三～二二七)中の二三三番歌題詞、及び二二四・二二五両番歌に関わる題詞において、人麻呂が石見国に「依羅娘子」なる「妻」を有しておったことを重ねて語っているのであって、万葉集殊に「原撰万葉集」の題詞は時として編纂時における編纂者の作歌理解の反映と思われる内容を含むが故に、そこに全幅の信を置くことは危険であるものの、しかしながら、その題詞を伴う作歌群こそが我々に与えられた万葉集の現実である、という厳然たる事實はそれにもまさる重みを有するものであり、従って、作歌自体の厳密なる内部検証の結果が如何ともし難く題詞の存在を許さぬという言葉は、つばつまつた状況の下においてではなく、比較的安易に題詞を否定する、神田氏の態度は直ちに受容し得るものではない。唯、我々は、そこで神田氏が「依羅娘子」に関して語る以下の事実、即ち、「依羅娘子」の「依羅」とは「娘

子」の属する氏族名にあらざしてその居住する地名を表し、しかも、その「依羅」なる地が石見国においては発見し難いというその事實は、本稿の今後の展開とも重要な関わりを有するものであり、銘記されねばなるまい。

さて、「石見相聞歌群」を基本的には万葉集の与えた条件——題詞に導かれた作歌群としての条件——を条件として受容するという態度で受け止めるとして、我々が遭遇する第一の問題点は、それが多くの「或本歌」を有し、また「一云」という形での割註による異伝を有する歌群であるということよりして、それら異伝の有する意味合いを如何に解すべきか、という点である。その点に關しては、従来、大別して(1)人麻呂の作歌が何らかの経路で伝誦され、そうして生じた異伝の資料が巻第二の編纂者により万葉集中に収められたものである、(2)それら「或本歌」群及び「一云」形式の割註で伝えられる詞句を含む作歌はそれぞれの段階における人麻呂の推敲の跡を見せているのであって、そこに我々は人麻呂の演練の態度を見るべきである、との二つの立場が存するのである。が、我々は、この二つの立場の間で迷う必要はない。前述の伊藤氏の論稿において、既に完全なる結着を見ているからである。ここに、伊藤氏の論旨を私なりに整理したその概要をしるしておく。(1)先ず、現存の「石

見相歌群」は、A・B・C・D・H・I歌の第一群、E・F・G歌の第二群、及びJ歌の妻の歌、この三者に区分することができる。(2)次に、上記第一群の内容を、(1)人麻呂がその「妻」(妹)との決定的な別れを余儀なくせしめられる見納め山としての「高角山」の存否、(回)見納め山での決定的な別離の後、しかしながら、人麻呂の心の中に深く包み込まれることにより終に永遠性を獲得するに至った「妻」(妹)に關わるC歌の存否、この二点により整理するとき、第一群は、H・I歌(第一稿)↓A歌の「一云」系統歌・D歌(第二稿)↓A歌本文・B・C歌(最終定稿)の順で成長を遂げたものと思われる。(3)次いで、第二群に目を向ければ、そこにも「一云」系統歌群の存在が認められ、この場合も、E・F・G歌「一云」系統歌群(第一稿)↓E・F・G歌本文(最終定稿)の順で成長したものと思われる。(4)そこで、第一群の最終定稿歌群(A歌本文・B・C歌)及び第二群の最終定稿歌群(E・F・G歌本文)の關係を窺うこととなる。両者は連作の關係にあるが、第二群長歌(E歌本文)の前奏部(海の叙述)は第一群長歌(A歌本文)の前奏部(海の叙述)を踏まえて簡略に展開されている。一方、両群を時間的・場面的に比較してみるなら、第二群は第一群より明らかに前に属するのである。このことを纏めれば、

第二群は、第一群の中途に立ち入り、第一群が内包していたもの及び第一群が歌わなかったところを詳しく描くことにより、第一群に呼応し、更に大きく深い悲しみを誘おうとした歌群である、ということになる。(5)こうした歌群の体系・構図——いわば求心的構図は、しかしながら、最初から人麻呂の企図したところではなかった。人麻呂は、彼が最初のロマンの歌(第一群第一稿)を提供した持続宮廷サロンにおける聴衆の続篇要請の声に応えんがため、構図を工夫し、終にかかる求心的構図を実現したのであった。そして、かかる求心的構図は、そこに人麻呂の悲別の心情の発端をなす〈妻〉の歌(丁歌)を添えることにより、真の完結をみることとなる。この〈妻・依羅娘子〉の一首を添えた人物は人麻呂その人であった、と思われる。

この伊藤説は万全のものである、と言ってよい。この説を前にして、梅原説は恐らくはその立論の根拠を失うところとなる。例えば、梅原氏は、「第二の長歌(E歌——註筆者)の方から、人麿が妻とあったのは『辛の崎』であることが明らかであるが、(中略)もし、そこを人麿がいた場所とすると、『渡の山』と『屋上の山』は、ともに明らかに、この『辛の崎』より西となり、上京するはずの人麿は、かえって東から西へ行ったことにな

る。」歌は、女に別れて都へ行く男の悲しみを歌っている。その悲しみは異常である。しばらく同棲した現地妻と別れる。それはたしかに悲しいことである。しかし、そういう場合、悲しむのは、男の方より、むしろ女の方である。(中略)もし賀茂真淵以来の人麿朝集使説に従えば、人麿は朝集使として一時都に上るだけである。半年もすれば帰ってくるはずである。それなのに人麿はどうして、そんなに悲しむのか。あたかも朝集使としての一時の旅が、一生の別れを意味するかのように嘆いているのはなぜであろう。このように説いて、前記のごとき結論——水死刑に処さるべき運命の下に、妻と共に過した国府沖合の韓島(鴨山)——註筆者)を離れ、一人高津の沖合鴨島(鴨山)——註筆者)の地に移送される、流人・人麻呂とその妻の悲傷の詠歌群として本歌群を解さんとの立場、を導かれるのである。が、この結論を導く前提部分は、真淵以来の人麻呂朝集使説を批判するには有効なものであるとしても、本歌群を人麻呂その人の実人生の忠実なる反映と見る立場を離れ、持続宮廷サロンの要請に応えて作された人麻呂の創作詠と見る、伊藤説に対してはこれを否定する何らの有効性をも有するものではない。それが人麻呂の現実の旅のさなかに作された詠である場合に限り、地名が交錯し不規則に登場する

ことはゆゆしき事態と言ふべきであろうが、いまこれが現地の地理に暗い宮廷サロンの人々に向けて、伊藤氏言うところの〈求心地構図〉のための表現効果をねらって利用された地名であるとすれば、その地名の交錯・登場の不規則性はさしたる問題とはならぬからである。梅原氏のごとく、この詠歌群をその創作性を排除し完全なる事実の反映としてのみ見んとする立場を保ち続ける限り、例えば、中西氏がE歌に関連して述べられた、昼間の黄葉と夜の月があり次いで夕方の落日があるという問題などは、まさしく、いかにともなし難い矛盾として残ることであろう。さらにはまた、梅原氏が異とされた、人麻呂のその〈妻〉(妹)との別れに際しての悲傷の甚しさにについても、曾て中西氏が説かれ、今伊藤氏が論じられる、<sup>(註5)</sup>宮廷サロンにおける聴衆に向けられた詠歌なるが故の高唱性、との観点に立つとき、それは直ちに氷解し得る疑念であった、と言えるのである。

余りに強い信念は、往々にして冷静さを失わしめるものであるようだ。今の梅原氏の場合がそうであった。氏は、氏の定めた結論、即ち、〈鴨山〉において水死刑に処されるべき人麻呂の悲劇という結論を万全のものとするべく、その過程を整えるに急でありすぎた。一見ひたすらなる私情の吐露と見えながら、実はそこに聴衆への表現

効果という一事を念頭に置きつつ重ねられた演練の跡を際やかに留める、この〈石見相聞歌群〉の「或本歌」及び「一云」なる割註による異伝の存在の意味を、梅原氏は看過するべきではなかった。

### 三

さて、梅原説に対する詳細なる検討は後考に委ねることとし、本稿は引き続き、〈石見相聞歌群〉の創作に際して選び取られた素材と人麻呂の実生活との関わりにつき考究することとする。

先ず、人麻呂の〈妻〉とされる〈依羅娘子〉の実態を窺うことより始めよう。この問題は後にいまだ一度触れるところとなるが、人麻呂には現実には石見国〈角の里〉に残し来った〈依羅娘子〉なる〈妻〉が存したか否か、それを考えることは、この作歌群の創作性を際立たせる上で最も効果的であるからである。

ここに想起されるのは、前掲せる神田秀夫氏の、題詞の説く〈妻・依羅娘子〉を疑い、この〈石見妻〉は〈石見娘子〉としも称すべき人物——恐らくは石見の国在住の遊行女婦のごとき存在であったろう、とする見解である。かかる見解を導いた根拠として、神田氏の説かれたところは、この〈娘子〉に係る〈依羅〉の称は〈娘子〉

の所属する氏族名にあらずしてその居住する地名を表すものであり、しかも、その〈依羅羅〉なる地が石見國において発見し難い、との一点のみであったが、なお、我々は、この神田説を補強し得る数点の根拠を有してゐる。即ち、〈石見相聞歌群〉の内部検証を通じて、(1) A・H 両歌により、〈娘子〉は石見國〈角の里〉をその本貫とする女性であり、(2) しかも、E 歌により、人麻呂とその〈娘子〉との関わりは、「さ寝し夜は いくだもあらず」という短期間に過ぎぬものであって、その結果、この〈娘子〉とは、京師の人なる人麻呂の嚴密な意味における〈妻〉とは称し難いこと、さらに、この〈石見相聞歌群〉の限定を超え、広く万葉集の全体を視野に収めるとき、(3) 〈娘子〉の称を得る者には、筑紫娘子児嶋(三八一九六五・九六六)・蒲生娘子(四二三三)のごとく明確に〈遊行女婦〉なることを伝える者、及び、清江娘子(六九)・常陸娘子(五二二)・豊前国娘子大宅女(七〇九・九八四)・豊前国娘子紐児(二七六七・一七六九)・播磨娘子(二七七六・一七七七)・娘子(二七七八)・娘子(三六八二)・対馬娘子玉槻(三七〇四・三七〇五)のごとく〈遊行女婦〉かと推測せられる者が多いこと、以上の三点がそれである。

かように、一方において〈石見妻・依羅羅娘子〉を否定

する条件は徐々に整いつつあるに拘らず、他方〈石見相聞歌群〉中の J 歌題詞は明確に「柿本朝臣人麿の妻依羅羅娘子」の称を留めているのであり、また前述のごとく、〈石見挽歌群〉中の二二四・二二五両番歌に関わる題詞も「柿本朝臣人麿の妻依羅羅娘子」の称を留めているのであって、それら題詞は、飽く迄も石見國なる人麻呂の〈妻〉が〈依羅羅娘子〉なる称呼を以て呼ばれる女性であることを主張し続けているのである。この錯綜の糸は、一見いかにしても解きほぐしような無いものであるやに見受けられる。

が、幸いにして、ここに我々はあらゆる疑念を払拭し去る、伊藤博氏の貴重な見解を得ている。伊藤氏によれば、〈依羅羅娘子〉とは、河内国丹比郡依羅の地を本貫とする女性であり、持統宮廷サロンにおいて、〈石見相聞歌群〉・〈石見挽歌群〉両歌群が人麻呂により発表せられるとき、常に〈石見妻〉を演ずる、人麻呂ロマンのファンであり同時に良き共演者であった、ということになる(〈石見挽歌群〉の創作性に関しては、伊藤氏の論に併せて、拙稿「人麻呂作歌」の世界(一)——臨死時自傷作歌を契機として(『萬葉集作歌とその場』所収)を参看されたい)。解けてみれば、事は何事も無かったのである。我々は、知らず知らずの中に、〈石見相聞歌群〉が創作詠であることを

忘れ、その生成の場を考へること無しに、全てを人麻呂の実人生の反映と見ようとしたが故に、出口の無い迷路に迷い込みかけていたのであった。万葉集にはまた、「娘子」の称を得て登場する、「采女」へ「女孀」のごとき存在も相当数見えているのである。舍人娘子（六一・一七・一六三六）・土形娘子（四二八）・出雲娘子（四二九・四三〇）・娘子（五四三・五四五）・娘子（五四六・五四八）・娘子（六九一・六九二）・狭野弟上娘子（三七三・三七八五）などがそれであり、三八〇七番歌の作者は陸奥国に帰参した「風流の娘子」なる「前采女」であった。そして、当面の問題たる「依羅娘子」とは「女孀」であった、と思われる。

さて、論はやや協道に逸れてきた。本筋に戻さねばならぬ。唯、私がかような論の展開を企てたのも、持統宮廷サロンにおける人麻呂のロマン生成の営みが決して単独で進められることはなく、「依羅娘子」をはじめとする宮廷サロンの構成員、主として女性たちとの交流を通してなされたであろうことを、ここに暗示しておきたかったからに他ならない。

#### 四

ところで、この「石見相聞歌群」の成功が、(1)「寄り

寝し妹」のしなやかでなよやかな姿態のイメージとの重層性を見せる、荒磯に朝風・夕浪を受けて揺れ靡く、「玉藻」の妖艶な形象（A・E・H歌）、(2)見納め山たる「高角山」における「妹が門見む 靡けこの山」の嘆きの痛切さ（A歌）、及び、その「高角山」における最終の交感を願う「袖振り」のひたむきさ（B・D歌）、(3)見納め山での決定的な離別の後、しかしながら、人麻呂の心の中に深く包み込まれることにより終に永遠性を獲得するに至った「小竹の葉」の歌（C歌）、これらの達成に係っていることは、更めて言う迄も無い。そこで、これらの達成が人麻呂の現実の体験をどれ程踏まえてのものであるかを考へることは、「歌人・人麻呂」の本質を知る上で極めて興味深いことである。よって、以下、順次それを考察してゆくこととする。

I 天雲の 影さへ見ゆる 隠口の 泊瀬の川は 浦無

みか 船の寄り来ぬ 磯無みか 海人の釣為ぬ よ

しゑやし 浦は無くとも よしゑやし 磯は無くと

も 沖つ波 競ひ漕ぎ入来 白水郎の釣船

II 少女等が 麻笥に垂れたる 績麻なす 長門の浦に

朝なぎに 満ち来る潮の 夕なぎに 寄せ来る波の

(卷第十三・三三二五)



その潮の いやますますに その波の いやしくし  
くに 吾妹子に 恋ひつつ来れば 阿胡の海の 荒  
磯の上に 浜菜つむ 海人少女ども 纓がせる 領  
巾も照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白袴の  
袖振る 見えつ 相思ふらしも (三三四三)

III 大君の 命畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真

木積む 泉の川の 速き瀬を 竿さし渡り ちはや  
ふる 宇治の渡の 滝つ瀬を 見つつ渡りて 近江

道の 相坂山に 手向して わが越え行けば 楽浪

の 志賀の韓崎 幸くあらば また還り見む 道の  
限 八十限毎に 嘆きつつ わが過ぎ行けば いや

遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 劔刀  
鞘ゆ抜き出でて 伊香胡山 如何にかわが為む 行

方知らずて (三三四四)

(反歌略)

IV ももきね 美濃の国の 高北の 八十一隣に宮に

日向糸 行靡闕矣 ありと聞きて わが行く道の

奥十山 美濃の山 靡けと 人は踏めども 斯く寄

れと 人は衝けども 心無き山の 奥十山の 美濃

の山 (三三四二)

甚だ古格を留める巻第十三の長歌四首を並べてみる。

その傍線を付した部分をA・H両歌と比較するとき、我はその余りの類句性に驚きを禁じ得ない。これら四首には、無論、石見国の地名や、〈玉藻〉の浪に揺れ靡く、形象を「寄り寝し妹」のしなやかでなよやかな姿態へ重ね合わせてゆく手法や、「妹が門見む 靡けこの山」の感情の高潮は未だ見られぬものの、なお、この四首を合成すれば、A・H両歌の骨格がほぼ完成することは間違いない。

ところで、この四首中のIII歌については、実は、この長歌には本稿で省略に付した反歌一首が添うており、それに続く左註に「右二首。但しこの短歌は、或る書に云はく、穂積朝臣老の佐渡に配さえし時作れる歌なりといへり。」とあることも与って、例えば岩波書店刊「日本古典文学大系本」頭註のごとく、「左注には、短歌が、穂積朝臣老の佐渡に流された時の歌だとあるが、長歌も同時の作と見てよいならば、万葉集卷一・卷二の資料は穂積朝臣老の流された養老六年(七二二年)註筆者)以前に集成されていたと見ること出来よう。」として、この一首を〈石見相聞歌群〉その他の人麻呂作歌、〈藤原宮役民作歌〉、〈有間皇子、自傷結松枝歌〉などの綴り合わせ、と見る立場も存するのだが、いかがなものであるうか。と言うのは、このIII歌の傍線部が「いや遠に 里

離り来ぬ」であり、本稿第二節で伊藤説に従い整理しておいたごとく、〈石見相聞歌群〉の第一稿と見做されるH歌はこれと同じ「いや遠に 里離り来ぬ」であるに對し、第一群の最終定稿(第三稿)と見られるA歌本文では「いや遠に 里は放りぬ」となっているからである。最終定稿完成以後のその模倣とされる作歌が、わざわざ未定稿たる第一稿の資料に依るいわれは無いからである。

I歌との対比においては、I歌が「浦無みか……磯無みか……よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 磯は無くとも」であることが影響して、一度は第二稿たるA歌「二云」系統歌が「浦無しと……磯無しと……よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 磯は無くとも」となつたものが、最終定稿たるA歌本文では「浦無しと……浦無しと……よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 磯は無くとも」の形に定まったらしい経緯も窺われる。このI・II歌に関連して注意されるのは、それらが「白水郎の釣船」「浜菜つむ 海人少女ども」を詠じている点であり、次に論ずるところとも関連するが、B・D・I歌の〈袖振り〉を導く契機となり得たはずの、「櫻がせる 領巾」「白袴の 袖振る」の詞句が見られる点である。

いずれにしても、かように見來るとき、〈石見相聞歌群〉が石見国における人麻呂の実体験に依らずには生まれ得ぬ、という底のものではないようだ。石見国より京師への道筋における地理的感覚も、必ずしも正しく働いているとは思えぬふしもある。無論、石見国に對する知識が皆無というわけではないが、この程度の知識は伝聞に基づくものであるとも考えられる。伝聞に基づく知識とすれば、いかなる伝聞の経路が考えられるか。可能性は二つ考えられる。その一は、宮廷サロンの構成員の石見国出身の采女を経由する場合である。その二は、「孝昭記」に柿本臣同祖族と伝える〈都怒山君〉の本貫の地が或いは〈石見相聞歌群〉の舞台たる〈角の里〉かとされることよりして、この同祖族を経由する場合である。この両者の複合形式による伝聞という場合も考えられる。重ねて言うが、この〈石見相聞歌群〉における風景は、言うならば一つの〈心象風景〉であり、〈実景〉そのものではないことに注意する必要がある。

その場合に、現実の体験のそのままの反映でないという点であるなら、〈石見挽歌群〉も併せて、何故にそのロマンスの舞台が〈石見国〉であるべきか、それを考えねばなるまい。その理由は、恐らく、この〈石見国〉が京師の人々にある種の憧憬と不安とを同時に抱かしめ

るところの〈異境〉としての意識で受けとめられていた、ということに尽きるであろう。〈異境〉と言えば、長らくその中心をなしていたのが〈出雲国〉であった。〈石見国〉は、言わばその〈出雲的世界〉に属していた。しかも、その〈出雲的世界〉にあつて、〈石見国〉は最も後代まで〈未知の国〉であり続けた。石見国に単独の国守が置かれるのは、天平宝字七年（七六三年）を俟たねばならぬのである。そのような〈石見国〉が〈石見相聞歌群〉・〈石見挽歌群〉の舞台として相応しいものであることが知れよう。

## 五

第二節にも述べておいたが、〈石見相聞歌群〉において一の焦点をなすものは、見納め山たる〈高角山〉における人麻呂の〈袖振り〉の詠である。人麻呂の悲別の情はこの一瞬に凝集せしめられたかの感がある。

ところで、私はここに、些かとつびな問いを發しておこうと思う。人麻呂の文学の何たるかを知るために、それは無意味なものではない、と信ずるからである。さて、その問いとは、人麻呂は果してその現実の生活の場にあつて、別離に際し袖を振る、という習慣を有していたか否か、というものである。かかる物言いに對し奇異の

念を抱く向きも多かるうと思う。無理も無い。別離に際して手を振り交す習慣を我々は有しているのだから。しかしながら、そうした習慣といえども自然發生的に生じるといふわけのものではない。そこには何らかの淵源が存せねばならぬ。

しかも、厳密に考えねばならぬ。我々の習慣は手を振り交す、というものであり、袖を振り交しているわけではない。「無い袖は振れぬ」という諺の通り、我々の着衣には、もはや振るための袖さえ無いのである。そして、実は、人麻呂の時代にあつても、男子の通常の衣服には袖は存していなかったのである。この時代から奈良朝にかけて、男子にあつては、御即位・大嘗の御儀、節会の際などに着用する礼服こそ大袖のものであつたが、朝服は文官の有欄衣・武官の無欄衣共に袖は狭く、殆ど筒袖に近いものであつたのだ。〈袖〉とは、本来〈幣〉に通じ、鎮魂のための一の呪物としての用途に發しているのだ。万葉集中に「宮人の袖付衣……」（巻第二十・四三一五）の一首の存することも、注意されねばならぬ。時代はやや降るが、「続日本紀」称徳天皇宝龜元年（七七〇年）三月辛卯（二十八日）条は葛井氏以下六氏の者による〈歌垣〉のことを載せているが、そこでも、「歌の曲折ごとく袂を挙げ節を為す。」（訓読傍点筆者）と、その所作を興

味深く見守っている雰囲気は読み取れるのである。

それでは、ここに、万葉集中に収められる、当面する〈石見相聞歌群〉のそれを除去した、全ての〈袖振り〉に関わる詠の歌番を列記し、後にそれらを検討することより得られる結論を述べることにする。

巻第一 二〇 巻第二 二〇七 巻第三 三三六 巻第四 五〇一 巻第五 八〇四 巻第六 九六五・九六六 巻第七 一〇八五 巻第八 一五二五 巻第九 一七四〇 巻第十 二〇〇九 巻第十一 二四一五・二四八五・二四九三・二六〇九 巻第十二 三〇一三・三一八四・三二二二 巻第十三 三二四三 巻第十四 三三七六・三三八九・三四〇二 巻第十五 三七二五 巻第十六 三八六〇・三八六四 巻第十七 三九九三 巻第十八 四〇五五・四一二五 巻第二十 四三七九・四四二二

以上が万葉集中に見える〈袖振り〉に関わる詠歌の全てである。これらその内容により整理すれば、(1)呪術的な目的で行われる〈袖振り〉、(2)別離に際し悲別の情より行われる〈袖振り〉、(3)親愛の情を表すための〈袖振り〉、(4)舞曲・歌語りなどに伴う所作として行われる〈袖振り〉、(5)現実の〈袖振り〉の所作を基底に据えつつ、「袖振る」の語を序詞などの修辭として用いている

もの、のごとく纏めることが可能である。

これをいま少しく詳細に語っておこう。先ず、(1)の場合について——①〈海人族〉の生活に関わるもの、②〈東歌〉・〈防人歌〉を通して窺い見る、〈東人〉の生活に関わると思われるもの、③〈袖を振る歌〉(九九五・九九六番歌)に関わる左註参照のこと)などの形式を育みつつ、〈遊行女婦〉の生活に保たれていたと思われるもの、かように区分しておこう。①の〈海人族〉における〈袖振り〉は、多く〈領巾振り〉も同様に、風波を自由にする呪術として行われたものらしく、そのことは、天の日矛の招来した宝物中に、〈浪振る比礼〉〈浪切る比礼〉〈風振る比礼〉〈風切る比礼〉の存した(「応神記」天の日矛条参照)ことより推察せられる。筑前国志賀の白水郎なる荒雄の〈袖振り〉(三八六〇、三八六四番歌)はその一例である。〈浦島の子〉の場合(二七四〇番歌)には、そうした本来の意義は既に完全に不明となっているもの、なお、海人族に保たれていた〈袖振り〉の呪術的印象が足すりの呪術的印象と併せて、作者蟲麻呂により詠じられているのである。②の〈東人〉における〈袖振り〉は、既に親愛、悲別の情を表すためのものとなった例(三三七六、三三八九番歌)も存する一方、〈碓氷の山〉(三四〇二番歌)や〈足柄の御坂〉(四四三番歌)など、

旅中であつて「異境」(果なる信仰圏)との接点をなす地に立って行われる「袖振り」が注意されるのである。こうした例は、やがては(2)の「見納め山」における悲別の場合に從う「袖振り」に繋がつてゆくのであるが、本源的には、旅中であつて自らと「家なる妹」双方の靈魂の動揺を鎮めるべく行われた、一の鎮魂呪術であつたと思われる。

(3)の場合について——。この親愛の情を表すための「袖振り」とは、前述「東人」の呪術的な「袖振り」の延長線上に存するものでもあり、現代における親愛の情を表すべく手を振るといふ我々の習慣にも繋がるものであるが、なお、この系統には「七夕」を素材として「織女星」の「袖振り」を詠ずる例が多い(一五二五、二〇〇九、四二二五番歌)ことより、次に説く(4)・(5)とも関連して、文雅の宴として催された「七夕の歌宴」において、詠歌に添えて一の所作としての「袖振り」が演じられたことも予想される。

(4)の場合について——。このあたり、(3)・(4)・(5)と重なり合う点も多いのであるが、ここでは、一般に個人の実生活の内部で行われた「袖振り」と受け止められている、「蒲生野に遊獵したまふ時」の大海人皇子の「袖振り」(二〇番歌)、「中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答

の歌」中の一首(三七二五番歌)の計二首は、前者は「大歌所」管掌の「雑楽」に付随せる「雑歌」であり、後者は「宮廷サロン」で享受せられていた「歌語り」であつて、共に詠唱に合わせて「袖振り」の所作が演じられたもの、と考えられることのみを述べておきたい。二〇番歌のそうした性格については、曾てのものした拙稿(註10)により確かめられた。

さて、最後の(5)の場合について——。本稿はこれを契機として展開することとなる。

少女らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆゑひけりわれ  
は (巻第十一・二四一五)

吾妹子や吾を忘らすな石上袖布留川の絶えむと思へ  
や (巻第十一・三〇二三)

既にして、ここには現実に袖振ることを囑目的に詠ずるに止まらず、少女の袖振るあでやかな舞姿を浮き立たせつつ、それを序詞という修辭に転換する、知的興味に從う詠が現れているのである。「古今相聞往来歌巻」としての巻第十一・十二が、現実の民謡を含みつつも、全体的には雅宴を中心とした文芸的な演練の場の詠歌の集成であることが、つけても想起されよう。ところで、この前者は「柿本朝臣人麿の歌集」所出の詠と伝えられるが、人麻呂にとってはこの素材及び修辭はよほど心に懸

かるものであったと見え、巻第四にはこの少異歌「未通女等が袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひきわれは」(五〇一番歌)が人麻呂作歌として収められている。人麻呂歌集と人麻呂作歌との関係については、当然表記論の側よりも詳細な検討がなされねばならぬところであるが、いま表現論の立場により論ぜんとする私見に従えば、この両歌の關係は、飽く迄も二四一五番歌↓五〇一番歌というものであって、その逆ではあり得ない。眼前にあって袖を翻し舞う宴座の舞姫に対して、「少女らを」と呼びかけ——を詠嘆の間投助詞。それはまた、同様に宴座の詠なる日並皇子尊の一首(巻第二・一一〇番歌)の「大名児を」というあの呼びかけの態度と同質のものであるのだが——、引き続いて、「あなたがたが袖を振り舞うそのへふる」ではないが、布留の山の瑞垣、それが久しい昔より変わらぬ姿を留めているように、長きに亙り変わることもなくあなたがたを思い続けてきたことであつたよ、この私は。」と詠みかけるのであるが、「少女らを」の句のすわりの悪さからも却って生々しく伝わってくる、この二四一五番歌の即興的感興が、やがて修辭や表記に対する興味を深め、冷靜に歌脈を整え、歌語を改め、また「未通女」のごとき表記を求め、という五〇一番歌の態度に變じてゆくそのさまを、我々は見得るであらう。

う。対して、三〇一三番歌にあっては、修辭的な興味をからませながらも、未だこの無名作家の詠歌の基本姿勢は、袖を翻し宴座に舞う舞姫に対し、〈座の興〉としてその恋慕の情を表すことに保たれているのである。

さて、上掲の二首は修辭的な興味を多分に含むものであつたが、これらが恐らくは、舞姫によるあてやかな〈袖振り〉の姿態そのものに対し強い関心を抱いたところから生みなされたものであるに對し、巻第十一・第十二の兩卷には、また〈袖振り〉のその物語的氣分を漂わせる背景に對しての旺盛なる興味により書き留められたかと考えられる數首を収めている。巻第十一では二四八五・二四九三・二六〇九番歌の三首、巻第十二では三一八四・三二一二番歌の二首、計五首がそれである。これらは恐らく、京畿・近国の〈風俗〉として、采女、女孀、舍人のごときにより所作を伴い詠じられたものの採録であつたらう。この中の二四八五、二四九三番の兩歌が「柿本朝臣人麿の歌集」所載歌であることが注意される。曾て、私は、巻第二・一〇〇番の石川郎女に對する久米禪師の詠とされる一首が、実は持統朝の宮廷サロンにおける歌語りであろうと想定し、その根拠として、この一首が「妹は心に乗りにけるかも」なる一種流行の句を有しながらも、それは同想のしかしながら眞率な恋情

表出の詠たる「東歌」の二首(巻第十四・三四六、三五七番歌)に直結するものではなく、その「妹は心に乗りけるかも」の句を知巧的な序詞によって導く、巻第十所収の人麻呂歌集歌(一八九六番歌)の修辭に負うていると思われること、を示しておいたのであつたが、それは人麻呂歌集、延いては人麻呂と「東歌的世界」との親縁なる關係を思わせるものであつた。ここに耳慣れぬ「東歌の世界」なる語を用いたには理由がある。現存する巻第十四「東歌」中にも、そして今は伝わらぬいわば「幻の東歌」の中にも、東国出身の人麻呂・舎人らにより奉られた「風俗」の詠が存したことが推測せられ、それらを総稱して、いま「東歌的世界」と称したのであつた。そうした人麻呂・舎人らとの接觸を通して、未知の素材に觸れ、その詩囊を肥やすに至つた人麻呂の在り、方が、いま、この巻第十一の人麻呂歌集歌の在り、方の上にも、いわば重ね写真のごとく重なつて、私には見えてくるのである。

「采女の袖吹きかへす……」と志貴皇子も詠じた(巻第一・五一番歌)その采女のでやかな姿と、その伝えるところの「袖振り」の哀歎極みを尽くす幾多の「風俗」の詞章とは、やがては人麻呂の「石見相聞歌群」中「見納め山」たる「高角山」における哀切極まりない珠玉の一首(一三三番歌)に昇華してゆくものであつたらう。

## 六

さて、「石見相聞歌群の虚実」という論題を掲げながら、私はその「虚」——「石見相聞歌群」がいかに人麻呂の非体験の素材に多くを負うているか——を論ずることのみで終わってしまった。しかも甚だ雑駁な形で。「実」とは、そうした非体験の素材がいかにしてあの輝かしい「詩的眞実」へ導かれてゆくのか、を示すことに他ならないのであるが……この点「羊頭狗肉」のそしりを免れまい。本稿の雑駁さを埋めかつ人麻呂の詩の誕生を説く、別稿を遠からず著すことを約してお諒しを願いたい。

- 註1 中西進氏「別離」(日本詩人選2 『柿本人麻呂』所収)・伊藤博氏「石見相聞歌の構造と形成」(『古代和歌史研究』3 『萬葉集の歌人と作品』上所収)
- 2 『水底の歌——柿本人麻呂論——』上巻
- 3 『人麻呂歌集と人麻呂伝』
- 4 註1中西氏論考に同じ。
- 5 「辞賦の系譜」(『萬葉集の比較文学的研究』所収)
- 6 註1伊藤氏論考に同じ。
- 7 註3に同じ
- 8 註1伊藤氏論考並びに「人麻呂終焉歌」(『古代和歌

- 史研究3 『萬葉集の歌人と作品』(上所収)
- 9 高崎正秀氏「出雲系文化の東漸」(『文学以前』所収) 参照のこと。
- 10 拙稿「へ入麻呂作歌」の世界(二)——伊勢国幸時留京作歌の周辺」(『萬葉集作歌とその場』所収) 参照のこと。
- 11 拙稿「石川郎女——萬葉集卷第二(相聞)の世界」(『萬葉集作歌とその場』所収) 参照のこと。
- 12 拙稿「久米禪師と石川郎女の歌」(有斐閣『万葉集を学ぶ』第二集所収) 参照のこと。
- 13 拙稿「東歌・防人歌」(有精堂『高等学校国語科教育研究講座』第十卷所収) 参照のこと。